

世界の共同主観的 存在構造

廣松 渉 著

世界の共同主観的存在構造

廣松 渉 著



「世界を共有し、その世界はどのように構成されているのか？」人間を「共同主観的存在」と見る立場から、認識論の再構築と存在を目的とした廣松哲学、その核心を示す三巻、小説「カールルの地平と共同主観性」を収録。(第1巻・第2巻)



今からちょうど50年前の夏、私は大学の理学部物理学科の3年生であった。前年の1968年にはベトナム反戦運動の高揚、キング牧師暗殺、パリ五月革命、ソ連軍のチエコ侵攻など、世界はまさに激動の渦中にあった。

国内では69年1月に、東大闘争の象徴であった安田講堂の封鎖解除があり、その年の東大入試は中止された。そんな騒然とした雰囲気の中で、私自身は大学院で物理学の研究を続けるべきか、科学哲学という新たな分野に飛び込むべきか、進路について迷っていた。もともと私が物理学に興味をもったのは、中学生のときに友人から借りて読んだジョージ・ガモフという物理学者の「1,2,3:無限大」という本がきっかけであった。そこには相対性理論や量子論など、現代物理学の最新の話題が「時間の始まりはどこなのだろう」といった哲学的(?)な問いとともに魅力的に解説されていた。

物理学科に入ったものの、憧れていた物理学との間にはギャップがあり、やがて時間論などは物理学とともに科学哲学という分野に属することに気がつかされた。そんな折にたまたま出会ったの

読書日和

野家啓一さん



のえ・けいいち 1949年仙台市生まれ。東北大学教授、河合文化教育研究所主任研究員。「科学の難解性」などで山崎賞受賞。著書に「科学哲学への招待」など。

道選ぶ勇気くれた一冊

が、哲学者廣松渉が当時、雑誌「思想」に掲載していた「世界の共同主観的存在構造」(岩波文庫)である。読み進むうちに、私の眼は短い注に引き付けられた。「アインシュタインの相対性理論とマッハ主義との関係については拙稿『マッハの哲学と相対性理論』(マッハ『認識の分析』付録)を一覧願いたい」と記されていたからである。

この注を見た瞬間、私が目指していたのは、物理学と哲学を架橋する、こういう分野だという思いに駆られ、その晩はまんじりともせずに一夜を明かしたことを覚えている。次の日から、当時は絶版であった「認識の分析」を古書店で探し歩いたことは言うまでもない。

その意味で、この難解な哲学書は物理学から科学哲学へとルビロン川を渡る勇気を私に与え、背中を強く押ししてくれた一冊なのだ。

(哲学者)